

<p>学校教育ビジョン 【学校教育目標】心豊かにたくましく 自主的に活動し 自らの生き方を創造する 児童生徒の育成</p> <p>【めざす子ども像】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自ら課題を見つけ、進んで学び、将来の夢に向かって努力する子（自主性） ・一人ひとりの違いを認め、思いやりの心を持ち、他社も自分も大切にすること（道徳心） ・社会のルールやマナーを守り、責任を持って行動できる子（社会性） ・心身ともに健康で、何事にも根気強く挑戦し、やり遂げる子（健全な心身） 	<p>【経営目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業改善のために主体的に研究・研鑽し、確かな学力の向上に努める。 ・温かで優しい心を育成し、互いの良さを認め合える人間関係作りを努める。 ・基本的な生活習慣を身につけ、健やかな体の育成に努める。 ・小中併設校の特色を生かした連携の取り組みを深め、学校・家庭・地域との連携に努める。 ・組織的・機能的な学校運営に努める。
--	---

評価の項目	今年度の重点目標	具体的取組	主担当	現状及び取組状況	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	備考	判定結果 (中間)	判定結果 (最終)	今後の改善策
①教育課程・学習指導	基礎的・基本的な知識や技能の確かな定着を図り、学力向上をめざす。	授業のドリル練習・スキルタイム・家庭学習を通して学習の基礎となる漢字や計算の定着に向けて、反復練習させるとともに、個別の指導を充実させる。	学習指導部 (教務主任・研究主任)	スキルタイムや小テストの実施等により、漢字力や計算力は年々向上しているが、個人や学年によって基礎学力の定着に差がある。今後は、個に応じた適用題にも取り組ませ、学年でつづける力を確実に着けることができる基礎基本の指導を行い、学習の基盤づくりを行っていく。	【成果指標】 学年相当の漢字、計算の力が身につけている。	学年相当の漢字、計算のテスト結果が80%以上である児童の割合が A: 80%以上 B: 70%以上 C: 60%以上 D: 60%未満	国語科漢字テスト1回目と2回目 算数科評価テストの知識・技能の項目(学期末)	B	B	テスト成績80%の児童は、漢字全体71.6%から78.8%に、算数知識技能全体74.0%から75.2%に向上した。学年相当の基礎基本をつけるため、該当児童の実態とつまずきの様子を情報共有し、3学期は当該学年の基礎力復習のために個別支援の体制や、AIドリルすらを中心に、個に応じた適用題への取り組みを充実させていく。
	個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を意図した授業改善を推進し、そのために1人1台端末の効果的な利用を進める。	算数科を中心に個別最適な学習の手法として自由進度学習を取り入れ、各クラスで学期に1単元以上、算数科の自由進度学習を行う。	学習指導部 (教務主任・研究主任)	個別最適な学びを意識した授業に各教員が取り組んでいるが、1人1台端末を活用し、算数科を中心にさらに指導の個別化と学習の個性化を意識した授業改善を推進する。	【成果指標】 個別最適な学びを実現するために自由進度による算数科の授業に取り組んでいる。	算数科で自由進度の個別最適な学びを学期に1単元以上行うことができた教員の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	教職員アンケート (学期末)	D	A	算数科で自由進度学習の個別最適な学びを1単元以上行うことができた教員の割合は100%で、1学期の高学年中心の33%から、全学年への広がりが見られた。ICT活用指導力教科事業の推進により、個別最適な学びを保障するAIドリルや1年生でも使えるICTツールの利用が進んだことが要因である。今後は、個別最適な学びを支える教材研究やよりよい見取りの方法を教員全体で共有し、実践につなげていきたい。
②生徒指導 ※いじめの未然防止	学校全体でいじめの未然防止に努め、いじめのない学校づくりを推進する。	いじめアンケート・QI調査そして児童の日頃の様子などをとらえ、児童や保護者とときめ細かな関わりを大切にする。	生徒指導部 (生徒指導主事・道徳推進教師)	児童や保護者とのきめ細やかな関わりを推進してきている。学年によっては自分の思いを相談しにくい児童がいるので、特にその児童に気を配っていく必要がある。些細なトラブルでも早期に対応し、互いを思いやる優しい心をさらに育てていきたい。	【満足度指標】 児童が友人関係などで悩んだときに、相談できる人がいる。	友人関係などで悩んだときに、相談できる人がいる児童の割合が A: 100% B: 90%以上 C: 80%以上 D: 80%未満	児童対象アンケート (学期末)	C	C	相談できると答えた児童は、80.2%から81%と中間報告時より微増した。「相談したくてもできないことが多い」「相談できる人は全然いない」と答えた児童が17人いる。引き続き、学級経営で、友だちや先生に何でも話せる居場所づくりを意識するとともに、普段の何気ない会話を大事にして、学級担任がどの児童ともつながりを作っていく。
	明るく、自分からあいさつができる子どもたちを育てる。	児童会・学級会で目標をたて、さらに職員も取り組みを工夫してあいさつ運動に取り組む。	生徒指導部 (生徒指導主事・道徳推進教師)	児童は自分から進んであいさつをしていないと感じている。あいさつの大切さを指導し、教師も自ら模範となるあいさつを実践するとともに、学校全体であいさつについて考えていきたい。	【満足度指標】 明るいあいさつが、自分からできる。	明るいあいさつが自分からできる児童が多いと判断する教職員が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	教職員アンケート (学期末)	B	B	できていると答えた教職員は75%、「明るい挨拶が自分からできていない(どちらかと言えば含む)」と答えた児童は83.5%だった。企画委員会を中心にあいさつの取り組みに力を入れている。挨拶は人と人の心をつなぐことを繰り返して、集会や学級で伝えていくようにする。
③キャリア教育・進路指導	キャリアパスポートを効果的に利用し、将来に向かって希望や夢や目標をもって生きる意欲や態度を形成する。	キャリア教育でつづけた力や重点目標を意識し、年間指導計画に沿った指導を行うためにキャリアパスポートを活用し、年度当初の計画、イベント終了後・学年末の振り返りを充実させる。	生徒指導部 (キャリア教育担当)	キャリアパスポートの活用という新たな取り組みと義務教育9年のスパンでキャリア教育を意識して進めている。しかし、児童の自己肯定感の向上が見られず、課題となっている。「キャリアパスポート」のより効果的な取り組み方を工夫していく。	【満足度指標】 活動後に振り返りを行うことで、児童の自己理解、自己責任能力が高まっている。	振り返りを行うことで、児童の自己理解・自己責任能力が高まっていると判断する教職員が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	教職員アンケート (学期末)	A	A	100%の教職員が効果の高まりを感じていると答えており、各行事ごとに児童が成長している様子を実践に手応えを感じている。学年末には、児童へのメッセージを書き、保護者からコメントをもたせて完成させる。さらに、今後も日頃からのキャリア教育の視点の授業づくりを意識した授業改善、カリキュラム・マネジメントを進める。
④保健管理	自ら進んで、健康な体を作ろうとする態度を育てる。	学期ごとに「元氣アップ週間」を実施し、自分の生活を振り返る機会を持たせる。	保健体育指導部 (保健主事・養護教諭)	元氣アップ週間の取り組みを継続することにより、健康に留意して生活する意識は高まっている。しかし、早起きが苦手な児童やカードに○をつけることだけに終始し、自己の生活習慣の課題を認識して取り組むことができない児童も若干いるので、教職員や児童全体で共通理解して取り組めるよう声をかけていきたい。	【努力指標】 「元氣アップ週間」期間中の取り組みをもとに、自分の生活習慣の課題を解決するための実践力が身につけている。	「元氣アップ週間」に設定した全項目に○をつけている児童の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	元氣アップカード (実施後)	B	C	2学期までの取り組みの結果、達成率は78%であった。特に食後に必ず歯磨きをする児童が50%しかいなかったことから、歯の健康に対する児童の意識の低さがうかがえる。学校保健委員会での取り組みを生かし、冬休みも歯磨きを強化する取り組みを行っている。今後も継続していく必要がある。
⑤安全管理	安全教育を推進し、職員の危機管理意識と危機対応能力を高める	避難訓練は、本校の地理的条件を想定して行う。その他感染症予防等の職員の研修を行い安全教育の充実を図る。	教頭・安全管理担当	避難訓練や防犯教室は、小中で連携し、本校の立地条件を想定した訓練を行いたい。また、校内研修を通して安全教育に対する職員の意識を高め児童への指導に活かしたい。	【満足度指標】 避難訓練や研修会を通して、危機管理意識や危機対応能力を高めることができる。	避難訓練や研修会の実施により、危機管理意識や危機管理能力が高まったと判断する教職員が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	教職員アンケート 保護者アンケート (学期末)	A	A	保護者も教職員も90%を超える評価である。避難訓練や不審者対応訓練では振り返りも行い危機管理意識づけを行うことができた。今後も授業中や保健関係の危機対応の校内研修も計画的に行い教職員の危機管理能力を高めていく。
⑥特別支援教育	児童についての理解を深め、それぞれの児童の困り感が減るように支援する。	児童の困り感に対する支援を、専門相談や校内支援委員会等を通して検討し、実践していく。	生徒指導部(特別支援コーディネーター)	これまでも、児童の困り感が軽減するように支援方法を考えてきた。引き続き個に応じた支援方法を検討し、実践していきたい。	【努力指標】 児童の現状を把握し、支援の在り方を見直し、支援の必要な児童について現状を把握し、支援の在り方を見直す。	児童の現状を把握し、支援の在り方を見直し、実践できた教職員が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	教職員アンケート (学期末)	A	A	100%の教職員ができたと回答した。毎月の児童理解の会やケース会議で情報共有をする中で、自分の受け持つ児童に支援のアイデアを還元できていると考えられる。今後も保護者と連携して必要な支援の方策を探れるように職員間の情報共有を高めていきたい。
⑦組織運営・業務改善	小中の連携分担により円滑な組織運営に努め、業務の平準化をめざす	月1回小中合同の企画運営委員会を開催し、業務の分担や行事の内容の精選について検討する。	企画運営委員会 (校長・教頭・各主任)	業務改善の意識が高まっており、協力体制もできているが、業務が担当に偏りがちである。	【努力指標】 業務が平準化されるように企画運営委員会で見直し適切に仕事を分担し、実施することができる。	業務が平準化されるように計画し、実施することができた判断する教職員の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	教職員アンケート (学期末)	D	C	C4thの連絡掲示板や小中合同のクラスルームなどを活用しながら業務改善のための校務のICT化を進めていく。また、校務分掌部会を開き、業務内容の見直しや課題を話し合い、それを企画運営委員会でも共有し、業務改善につなげていく。
⑧研修	ICTの効果的、効率的な活用で授業改善を進める	効果的な研修を設定することにより、自分の授業を見直し、指導力向上をめざす。OJT等のサポート計画をもとに計画的に開催する。	研究推進委員会 (研究主任・GIGA推進リーダー若原)	ICTを授業で活用しているものの、活用が効果的であると教員も児童も感じない。	【満足度指標】 研修を通して身につけた技能を授業で有効に活用できた。	OJT、研修で身につけた内容を個別最適な学び、協働的な学びに有効に生かすことができた教員の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	教職員アンケート (学期末)	A	A	研修内容を生かすことができた教員は100%であった。ICT活用のために、様々なツールを使い慣れる研修を行い、教師の実践に活かすことができた。また、リーディングDX事業の自立した学び手育てる研修、毎週金曜日のGIGAスクール研修、漢字の指導法に関する研修は役に立ったとの声があった。研究発表会で受けた様々な助言を、3学期及び次年度の実践につなげていく。
⑨保護者、地域との連携	コミュニティ・スクールが中心となって、地域、保護者と連携し、「地域とともにある学校づくり」を進める	地域の方や保護者の協力を得て、学校行事だけでなく、地域学習や伝統文化の継承等における学習効果を高める。	教頭 各担当	児童の教育活動の充実のために、より積極的に、また、継続的に地域人材や保護者、学習の素材となる場所を活用する。	【満足度指標】 地域人材等を教育活動の中で積極的に活用し、教育的効果を高めることができる。	地域人材等を積極的に活用し、教育的効果を高めることができた判断する教職員と保護者が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	教職員アンケート 保護者アンケート (学期末)	C	A	2・3学期は、カリキュラム上での学年も積極的に校外学習や地域人材を活用することができた。今後は昨年度作成した「町の先生」のデータを更新し、新たな人材や地域教材を増やし、年間を通して継続的に活用できる授業カリキュラムを組むことでより教育的効果を高めたい。
⑩教育環境整備	ICT機器を活用し、児童が意欲的に活動できる教育環境の整備と教職員の業務改善を推進する	デジタル教科書等のICT機器を児童が効果的に活用できる授業を行うために教員のスキルを上げる研修を行ったり、教育環境の整備をおこなったりする。	事務・教頭・視聴覚担当	教師も児童も日常的に活用はできているが、より効果的にICT機器を使用できる環境の整備や児童の発達段階に応じたICTの活用の手立てが必要。	【努力指標】 効果的にデジタル機器を活用して授業や業務改善に取り組んだと判断する教職員が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	効果的にデジタル機器を活用して授業や業務改善に取り組んだと判断する教職員が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	教職員アンケート (学期末)	A	A	C4thの校内掲示板などを積極的に活用することで業務改善が進んでいる。リーディングDX事業および、GIGAスクール推進事業により、全学年Chromebookを効果的に使った学習に積極的に取り組むことができた。3学期は児童の利活用のさらなる推進とともに、校務へのクラウド活用をさらに推進していきたい。

<p>学校関係者評価</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・きめ細やかな目標を決め、その対応について丁寧な対策がなされている。 ・授業改善を進める教職員の皆様が手探りで大変苦労されているとは思いますが、児童の声に耳を傾けながら、児童たちにとってよりよい学びのスタイルを模索していただきたい。 ・個別最適な学習、ICTの活用では、校内評価委員会にもあるような「協働的な学び」をどう深めるかに課題があるように思う。児童の内側からの学びを育てる方法で、問いをたくさん出させ、全体で課題を追求する楽しさを実感してほしい。 ・1学期→2学期で、家庭での学習時間が減り、ゲームの時間が増えている。一方で理解力⑧のアンケートからは変わってないよう見えるため、学習時間＝理解力とは言い切れない。 ・明るく気持ちの良い挨拶を集会や朝の会でみんなが元気に実践し、地域の方々にも愛される子ども達になってほしい。 ・家庭への働きかけも含め、横や縦のつながりを作っていくと話せる関係性が広がり、誰かに相談できる話せる人がいるという思いがあると安心安全安定な学校生活が送れるのではないかな…。 ・生徒指導でいじめを重点目標にするなら、2022の生徒指導提要の改訂の趣旨に沿い、児童を主体にして、学校生活や仲間について普段から意見を言える体制がほしい。 ・アンケート結果を見ると3年生～高学年になると、否定的な思いを感じる子が気になった。他者から認められて自信を持ち、自分の良さを知り、自己肯定感を高めていくことで、めざす子ども像につながるのではないか。少人数学校の良さを活かし、学校、子ども、家庭、地域のつながりを深め、今後ご指導をお願いしたい。 ・CSを利用し、学校を応援する保護者、地域住民のボランティアを組織する方法を模索したい。 ・学校での取り組みや子ども達の様子など、毎月の学校通信で知ることが出来るが、行事参加等が増えると身近となりより実感が増すと思う。 ・安全及び防災に関して、学校でできることは簡略に繰り返し指導し、地域防災に児童も参加しながら一体となって知識と体験を身につけさせたい。 ・教職員の時間外勤務に家に持ち帰っての作業は含まれていないと思うが、実際にどうなのか表に出ない時間になっていないか。
----------------	--